経済論叢（京都大学）第176巻第4号，2005年10月

〈追憶文〉

大野英二先生を偲ぶ

——ある学者の風景——

肥　前　栄　一

I

京都大学名誉教授，大野英二先生は2005年9月6日，腎不全により逝去された。享年82歳であった。腎不全のみならず胸部動脈瘤，甲状腺がん，白内障といった諸病との格闘の末の，しかし穏やかな最後であったとうかがっている。遺言により葬儀は行われなかった。

私は1955年以降，京大経済学部において大野先生の講義を聴き，また大野先生の演習で近代ドイツ資本主義史を学んだ。私が大野ゼミに属したのは，学部2年間，大学院5年間（1955年4月～1962年3月）の7年間であった。当時は60年安保というピークを前にした戦後民主主義の高揚期で，スターリンの『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』，毛沢東の『実践論』，『矛盾論』，ソ連版の『経済学教科書』などが社会科学系の学生の共通の必読書となっていた。戦後改革の意義を否定する岩波書店の『日本資本主義講座』（「新講座」）が出始めたのもこのころのことである。

そうした「政治の季節」のなかで，私が大野演習を選んだのは，経済政策論＝ドイツ経済史の大野助教授が経済学史＝ロシア経済思想史の田中真晴助教授と共に，基本的にはマルクス経済学に立脚しつつも，当時の京大経済学部の多くの教授のように過度に政治主義的でなく，多くの文献を渉猟してそれを緻密に引用しつつ論文を作成するという，アカデミックな学風の持ち主で，また程よく非政治的であるところに惹かれたからであったように思う。大野ゼミではレーニン『帝国主義論』，ヒルファーディング『金融資本論』を読み，とりわけ山田盛太郎『日本資本主義分析』を読んだ。そして極めて実

証的な本書の編別構成が，マルクス『資本論』第2巻第3編の再生産表式論と有機的に関連していることに感銘を受けた。

しかし大野ゼミでは勉強ばかりしていたわけでは決してない。特に学部時代は，コンパをはじめ，合唱コンクール，ソフトボール大会，河上祭への参加，ゼミ旅行，工場見学，雑誌『乱反射』の発行，更にはデモへの参加など，ゼミ単位でのいろいろな行動についての楽しい思い出に満ちている。社会批判と内面的な悩みとおそらくは旧制三高以来の伝統であろういささかの耽美主義とを基調とするわれわれの学生生活は，物質的には貧しくとも，精神的にはかえって豊かであった様な気がする。当時私はトーマス・マンの文学を愛読しており，マン論を書いて『乱反射』に投稿したものである。そもそもリューベックの穀物商ブッデンブローク家の経済史的背景への漠然とした興味が，ドイツ経済史を内容とする大野ゼミを選んだ動機であった。

II

ちょうどそのころ，大野助教授は学位論文である名著『ドイツ金融資本成立史論』（有斐閣，1956年）を公刊され，学界に鮮烈にデヴューされた。本書はあれからちょうど半世紀を経た今日もなお，ドイツ金融資本＝帝国主義的経済政策分析の古典として活きている。

「ドイツ金融資本の成立過程の分析をドイツ資本主義の再生産構造のうちに位置づけて，その歴史的規定性（構造的特質）を把握する」（第3刷のために）ことを主題とする本書は，2部構成からなる。

第1部「ドイツ金融資本の構造」は，一方では，金融資本成立の基本線をベルリン6大銀行の独占体系と産業資本の独占体系との融合＝癒着の過程に求め，その出発点を「発起業務」と「正規の銀行業務」とを結合する「特殊ドイツ的銀行型」の成立に見出す。そして西ドイツ，南ドイツ，東ドイツについてその成立過程を追跡している。また他方では，新たな中核的銀行業務としての「交互計算業務」に焦点が当てられ，それを手段とする，銀行独占と石炭＝鉄鋼業，電機工業，化学工業，石油工業といったキイ産業における独占体との融合過程が分析されている。

第2部「ドイツ帝国主義と経済政策」は，金融資本の経済政策としての帝

国主義（上部構造）の分析である。著者は帝国主義的経済政策の中枢を，資本主義的独占体と半封建的な大土地所有者（東エルベのユンカー）とを優遇する「結集政策」に見出す。それは穀物保護関税の引き上げによって得られた財政収入によって艦隊を建設し，それによって「主農論者と工業家とを結合し，プロレタリアートの突撃にたいしてその支配を相互に保証しあう」（E. ケーア）ものであった。しかしこの内政的には成功した経済政策は，外交的にはドイツを宿敵フランスとの古い対立に加えて，イギリス，ロシアとの新たな対立へと追いやり，ドイツの国際的孤立化が始まる。ここに第一次世界大戦更には資本主義の一般的危機の時代が展望される。

構成の緊密さ，膨大な文献の読み込みと綿密な引用，山田『分析』を思わせる荘重な文字づかいと流麗な叙述，レーニンを基礎視角としつつもそれを教条としない観点の多様性，こうした特長を持つ本書はまことにマルクス主義的経済史分析の名著と呼ばれるにふさわしい。多くの書評が本書を高く評価し，宇野弘蔵，松田智雄，村瀬興雄，住谷一彦，吉岡昭彦といった多様な人々が，本書の成果に注目した。当時は欧米各国における金融資本の成立が先端的テーマであり，英米独の各国について，ほぼ同じ時期に生川栄治，古賀英正，鎌田正三，戸原四郎といった人々の有力な研究成果が現れているが，歴史的感覚においては本書が一番すぐれていたと思う。

当時学部学生であった私は，ゼミで本書をテキストとして用いることとなったので，友人（多分大月誠君）と一緒に有斐閣京都支店で人数分を購入し，風呂敷に包んでコンパ会場に持ち込み，全員先生に署名していただいたことを記憶している。Schön ist die Jugend. Herrn Hizen. E. Ohno と扉にドイツ文字で認められた本書の初版本が，今机上にある。自著をテキストにすることが先生には照れくさかったのであろう。コメントはそっけなく，あまり議論もされないままに読了したように思う。

ところで，飛躍するようだが，本書には今日とりわけ苦いアクチュアリティーがある。小泉純一郎現首相によって強行されている靖国神社参拝は，経済政策ではなく「宗教政策」であるとはいえ，大野先生がエッカルト・ケーアの視角によりつつ分析された「結集政策」における「内政の優位」の政策の今日的実践ではないのか。日本遺族会の意をたいすることによって，

それはさなきだに地政学的に規定されている日本の国際的孤立を更に絶望的にまで深めてしまうものではないのか。現在東アジアに徘徊するナショナリズムの亡霊に，多くの人が言い知れぬ不安を覚えていると思う。名著というものは常に，その著者の主観的意図を越えた射程距離を持っているのである。

III

私の大学院生時代は大野先生の第2作『ドイツ資本主義論』（未来社，1965年）の作成過程（その前半期）と重なっている。本書は前著と異なり論文集であり，9年間にものされた密度の高い13編の論文が「序論　危機の社会的基盤」，「第1部　基幹産業分析」，「第2部　労働関係分析」，「第3部　政策分析」に編成されている。

本書は一面では前著の継続という性格を帯びている。「序論」では恐慌論を踏まえてロシア革命＝社会主義革命への展望が模索され，また第1，2部もそれぞれ産業資本，賃労働といった諸範疇の分析として前著を補完するものである。しかしながら他面で，本書の重要な特徴は「大塚史学」への接近である。例えば第1部のオーバーシュレージエン製鉄業の「国庫的＝商人的独占」（＝前期的資本）をはじめ，全体的にドイツ資本主義を規定する封建的＝半封建的伝統の重みにより重点が置かれ，それと対応して第3部ではブルジョアジーの類型論が打ち出され，ケーアにおけるそうした類型論の欠如が批判され（388ページ），シュルツェ＝ゲーヴァニッツやウェーバーらの「自由思想連合」につながる反ユンカー（＝労働者と市民との提携）路線からの「結集政策」批判が積極的に評価されるに至る。

戦後民主主義に潜むスターリン主義的な不自由さの要素に本能的な違和感を覚えていた私は，大野先生のこのような「市民」の評価に示される「自由」への歩みに共感し，大野先生を通じて「大塚史学」の世界へと導かれた。

ところで，本書で評価された「自由思想連合」の政策は，それ自体としては紛れもなく反社会主義（少なくともソ連型の）と結びついた近代化路線である。それを評価する本書の行論は前著の方向性と調和しうるものであろうか。もちろん著者の主観ではそれは「なお完遂さるべきブルジョア的変革の課題についての認識」（同上）を提示したまでであって，社会主義革命の一環

をなすものとしての反封建闘争の課題を示した本書は，全体として前著を補完するものであるということになるのかもしれない。けれども比喩的に言って，いったいレーニンとウェーバーとの関連は後者が前者を補完するといったものなのかどうかが，提起さるべき疑問である。先生の立脚された「講座派マルクス主義」と「大塚史学」との関連は，年来私の気にかかる問題であった。

それはともあれ，私の大学院生時代は大野先生の第2作作成過程の前半期と重なるのであり，先生のデモーニッシュな勉強ぶりをまざまざと見せつけられ，また学部時代とは打って変わった鬼のように厳しいご指導を受けることとなった。

大野先生が私に提示されたテーマは，オーバーシュレージエン石炭＝鉄鋼業である。ところが私がおぼつかない足取りで歩み始めたときに，先生は本書の第1部の論文の準備を始められた。つまり私はテーマ的に大野先生と競合する立場に立たされたのである。私は自分の独自性をどうすれば打ち出せるかについて大いに苦しんだ。そして先生の関心が及んでいない鉱山王有権（ベルク・レガール）というものに想到し，これを中心に論文を作成した。当時たまたま立命館大学で山田盛太郎先生の集中講義があり，講義の合間に控え室で休んでお茶を飲んでおられるところを訪ねて「ベルク・レガールについて，どうお考えでしょうか」と尋ねたことがあった。すると先生は「極めて重要，極めて重要」と答えられた。寡黙な山田先生とはうかがっていたが，あまりにもお答えが簡潔すぎて，後をどのように質問するべきか考えていたところ，「この問題については，大野英二さんにお聞きになるといいです」といいわたされて，がっくり来たことを覚えている。また文献的にも競合した。ある夕方経済学部図書館のビュッヒャー文庫に入り，夢中になってみていたところ外から鍵をかけられて一晩書庫で過ごす羽目に陥ったことがあった。しかしおかげでビュッヒャー文庫を全部見，シュレージエン鉱山業関係の貴重な文献を何冊か「発見」し，借り出そうとしてカウンターにおいておいたところ，暫時の間に先生に無断で先に借り出されてしまい，先生のこの「ルール違反」に大いに憤慨して抗議したことなど想起する。先生には独善的なところがたぶんにあり，またその大学院生にたいするご指導の厳しさは

時として異常でさえあった。何人かの弟子たちが挫折した。

ビュッヒャー文庫はその後先生のご努力で整理され，立派なカタログもできた。

IV

その後私は関東地方に職場を得て別の道を歩み，英独比較の習作『ドイツ経済政策史序説』を「卒論」として先生に捧げた後，独露の社会経済史的比較の道に入り込んだ。この習作の作成過程では，先生が松田智雄先生と共に形成された「ドイツ資本主義研究会」を通じて引き続きご指導を受けた。

しかし先生は，その後次第に，上述の疑問を私に残したまま経済史を離れて，社会史や河上肇研究へ，更にはユダヤ人問題の解明へと進まれた。先生の新しい学問的発展の中心にあったのは，「ユンカー的＝ブルジョア的」ドイツ帝国主義の歴史的帰結としてのナチ・レジームへの関心である。先生は一方では旧西ドイツのヴェーラーやコッカとの交流の中で経済史よりも広い社会史の世界を模索されると共に，ナチ・レジームについて，その社会的基盤や経済政策の諸相を解明すると共に，被害者であるユダヤ人の歴史を，また加害者であるナチ親衛隊の知識人のプロフィールを描かれた。

半面において，20世紀後半にヨーロッパに生じた歴史的変化，すなわちスターリン専制体制を生んだソ連社会主義の崩壊と旧ソ連・東欧の「ユーラシア」と「中欧」とへの分裂，東西両ドイツの統一，EU による経済統合とその東方への拡大といった新しい発展が先生のよって立つ講座派マルクス主義や大塚史学の認識の枠組みにたいする再検討を呼び起こすことはなかった。より正確に言うならば，予期せざる諸帰結をもたらした歴史的現実を新たに把握し直すために自己の認識の枠組みを修正する道をではなく，資本主義批判の基本的信念に忠実に，すでに見事に築き上げた自己の学問の体系を守る道のほうを，先生は主体的に選びとられたように思われる。この意味で先生は信念の人であった。

そうした中で，私はヴェーラーの『ドイツ帝国（1871-1918)』の翻訳をお手伝いする機会があった。分担して訳稿を作成し，それを交換して相互批判を加えたのだが，先生の訳稿の生硬さに辟易するところがあった。論文作成

と翻訳とは，ややちがった種類の能力を要求するものであるらしいということが分かった。

翻訳といえば，私にとってより重要であったのは，先生のお勧めが一つのきっかけとなって，曲折の末，ウェーバーの『東エルベ・ドイツにおける農業労働者の状態』の拙訳を刊行したことである。田中真晴先生の名訳，ウェーバー『国民国家と経済政策』の新版に付する「解題」の執筆依頼を受けた大野先生が，ご自身に代わって私を推薦されたというのが，そもそもの未来社からの話であった。その後の事情は『状態』の「訳者あとがき」に記しておいたが，ともかく『状態』の「訳者解題」を書くに当たっての難問は，帝国主義の時代精神に棹差す若いウェーバーのスラブ人移動労働者にたいする人種論的蔑視とどう向き合うかであった。歴史学派に対立する「アメリカ型」のラディカルな近代主義者として若きウェーバーを描き出していた日本のウェーバー研究者たちはおおむね，この不都合な事実に目を閉ざしていた。結局私は1905～1906年の『ロシア革命論』以降のウェーバーの歩みの中で，彼の人種論克服過程を跡付け，まさしく人種論にたいする対案として提起された「歴史的個体としてのヨーロッパ」という晩年のウェーバーの立脚点に到達した。それは非ヨーロッパと対決するのではなく対話する文化相対主義の立場であり，ナチスにではなく，イラク戦争後のブッシュのアメリカと一線を画するEUのヨーロッパに通ずるものである。私は晩年のウェーバーの「歴史的個体としてのヨーロッパ」を通じて，自己の独露比較の観点が重層化したのを感じる。そしてこの重層化は，独露の経済史的比較に従事する私に向かって，初期ウェーバーの問題をどう解くかを問いかけられた，晩年の大野先生からの貴重な学問的贈り物であったと思っている。

先生は変わることのない勤勉さと，学徒出陣世代の社会科学者の批判的精神で，至らない後進を導かれた。学界の俗物や政治の堕落を批判してやまない孤高の魂，そしてとりわけ文学・音楽・絵画を受容する繊細な感受性は先生の大きな魅力であった。先生のご逝去によって，私にとっては一つの時代が終わったような気がする。

激動するヨーロッパと世界のかなたに大野先生が見える。まことに先生は一時代を画する学者であった。